

ご逝去された名誉会員への追悼文

今年から本学会名誉会員でご逝去された先生のご業績を会員の皆様にお知らせするため、ゆかりのある方に追悼文をご執筆頂き、掲載することとなりました。

喜田村正次先生を偲んで



大正4年8月21日生
昭和15年3月 京都帝国大学医学部卒業
昭和15年9月 軍籍
昭和24年11月 京都大学助教授
昭和29年3月 熊本大学教授(医学部)

昭和35年4月 神戸医科大学教授
昭和40年4月 神戸大学教授医学部
昭和54年4月 神戸大学名誉教授
昭和54年4月 神戸学院大学教授
平成15年1月3日 ご逝去

喜田村正次先生は2003年1月3日ご自宅において、奥様やご子息様ご家族の方々に見守られてご逝去されました。初めて奥様から先生の訃報をお聞きしたのは1月7日の夜でした。生前から静かに最後を迎えたいこと、身内だけでお葬式をして欲しいとのご意志が強かったことを奥様からお聞きし、最後の御見送りが出来なかったことを少々残念に思いましたが、私が知る先生の常々形式的なことがお嫌いなご性格そのものと納得いたしました。

確か数年前から電話では以前と同じお元気な声でお話されるのですが、食欲がないといつも言われていました。私から一度胃がんの検査を受けられるようにお勧めすればよかったと後になって悔やまれてなりません。先生が公衆衛生学を生涯の研究テーマに選ばれた理由は、当時は治療と言えは「栄養・休養」しかなかったので、医師の仕事として臨床医学に物足りなさを感じられ、予防医学を選考されたように私が大学院時代にお聞きしました。しかし、最後に予防医学の早期発見が遅れたことは、少々先生の頑固さも一因かと思いますが、本質的には先生の自然な生き方を重視された結果とっております。

先生は昭和15年京都大学を卒業され、同年9月から海軍軍医としてお国のために御奉仕され、昭

和20年軍医少佐で帰還されました。京大に戻られた後、昭和29年熊本大学医学部の教授に昇任され、そこで水俣病の原因究明に取り組まれることとなりました。昭和35年、当時の神戸医科大学学長のたつての懇請により、神戸医科大学に着任されました。当時では国立大学の教授が県立大学の教授に赴任することは異例のようでしたが、そのお陰で私は先生に巡り合い、その薫陶を受けることが出来ました。この世で最も尊敬できる方はと質問されたら、私は即座に喜田村先生と答えると思います。先生こそ真の上醫であり、学問のみならず学者としての生き方、さらに人間としての立派さを教えられました。何時までも喜田村先生のお弟子さんと言われることに誇りを感じてこの世界で生きてきましたが、優秀な先生の下では何時までもたつても不肖の弟子で申し訳なく思うばかりです。

先生は水俣病とイタイイタイ病は根本的に異なることを早くから言っておられました。それが学者の変節とマスコミが叩くの側を見ていて、先生のやってこられた「人の中毒学」などわかるはずがないと思っておりました。先生は外面とは違って、日本の学者を軒並み辛辣に批判されるのを聞いておかしく思ったことも度々でした。下さる手紙には同封された資料の腹の立つ部分に、馬鹿とか役立たずのデータとかコメントがついておりましたが、単なる批判ではなくて、先生の学問に対する信条の発露であり、私も先生から科学の真実は一つであることを教えられました。平成14年9月のお手紙には「日本には中毒学音痴、毒性学音痴の医学者揃いがあるから、世の中がおかしくなっただけだ」と断じておられます。恐らくあの世でもご講義をされ、周囲の方々をしっかりと教育されていることでしょう。この世の未熟な私達を是非あの世からご指導下さいませようお願いいたします。

ご冥福を心よりお祈り申し上げます。

内閣府食品安全委員会委員

小泉直子

橋本正己先生の公衆衛生



大正6年2月14日生
 昭和15年3月 大阪帝国大学医学部卒業
 昭和15年5月 軍籍
 昭和20年12月 国立病院医療事務嘱託国立鳴尾病院

昭和22年3月 豊中市立保健防疫所長
 昭和27年10月 厚生省入省
 昭和33年3月 国立公衆衛生院衛生行政学部長
 昭和57年7月 埼玉県立衛生短期大学学長
 昭和57年10月 公衆衛生審議会委員
 昭和61年7月 埼玉県立衛生短期大学学長を退職
 平成15年1月26日 ご逝去

橋本正己先生に私が初めてお会いしたのは、昭和53年8月26日のことである。この日、恩師の関悌四郎先生の1周年追悼記念の大阪公衆衛生集談会がもたれ、橋本先生に記念講演をお願いした。講演の中で、先生はご自分が公衆衛生の道を選んだ頃のことについて、次のように述べておられる。

昭和15年のご卒業で、アルファ会（阪大医学生の社会医学研究会）ができた頃でクラスの大半がアルファ会に入り、工場に見学に行ったり調査をしたこと、阪急豊中駅の近くに小さな教会があってその教会学校で育ったこと、13年5月、この教会に賀川豊彦先生と梶原三郎先生がおみえになって、1週間ぶっ続けて伝道集会がもたれたこと、梶原先生に「メソジスト運動とイギリスの公衆衛生」という講演をお願いしたこと、先生が公衆衛生に進まれたのは、この時の賀川先生の連日のお話しや梶原先生の講演が強い影響を及ぼしていること、大学を卒業して当時の第一外科の教授であった小沢凱夫先生の英知溢れる姿に魅せられて外科医になろうとしたこと、その後6年間、短期現役の海軍軍医として従軍し、この間に軍医学校の防疫学教室に勤務し、急性伝染病の対策と疫学を勉強し、何処かに流行があると飛行機で飛んで行って疫学調査を行ったり、非常に貴重な経験をしたこと、九死に一生を得て帰国して、伝染病と結核の猖獗の時代だったので公衆衛生に一生をささげようと思ったこと、そして戦後、新しい保健所がつくられることになり、関西の第一号のモデル保健所が豊中にできることになり、豊中は先生の生まれ故郷でもあり、この保健所に勤めることに

なり、それ以来、公衆衛生、とくに保健所活動にやみつきになったこと、豊中保健所には5年間勤務したが、この間の実践をつうじて、ローゼンの「公衆衛生とは、Community Health Actionである」ということの意味、つまりコミュニティが健康な生活を守るためのアクション、それが公衆衛生だということを身をもって学ぶことができたということ、そして昭和27年に大阪府から3年だけ暇をもらって行政の実際を勉強してきますということ、そして昭和27年に大阪府から3年だけ暇をもらって行政の実際を勉強してきますということ、厚生省に来て、その3年が、35年以上となり、ミイラとりがミイラになってしまったということ、など。(第3回大阪公衆衛生集談会会録より)

ここでは、故郷の大阪にひさしぶりにもどられて話しをされたということで、先生はご自分の学生のころから厚生省に赴任されたころのことを詳しく話しておられる。日本の公衆衛生の偉大な先達の若いころのことについての、非常に貴重なお話しとして紹介させていただきます。

橋本先生が東京に移られてからの先生のご活躍ぶりについては、先生ご自身が意欲的に多くの書物を出版されているので、先生のお仕事についてはそれらのご本を見ていただくということでここではお許しいたいて、私はやはりこの講演の時に、先生が述べられた次の言葉を紹介させていただきます。

「私も既に、30年ばかり日本の公衆衛生に没入しておるわけですが、近ごろどうも省りみて、少しチャドウィック的なものの考え方に染まりすぎてきたのではないかと考えるようになってまいりました。つまり一人一人の健康とか、福祉とかいうものを、もっと暖かく見つめるというような態度を忘れて、何かすぐ集団で社会的に、政策とか制度とか計画ということに非常に走っていったのではないかと思う次第です。しかしこれからの公衆衛生はこういうことではいけない、健康というのはすぐれて一人一人のものですから、公衆衛生もまた一人一人のものでなければならないと思う次第です。今頃そのようなことに気がつくのでは遅いではありますが、そういうことを私はつくづく痛感しております。」

先生はイギリスに学び、公衆衛生の基本のあり方を示していただき、戦後、わが国が公衆衛生の道を歩むのに、先生こそ最大の理論的指導者であったといっても過言ではないと思う。先生に心からの敬意と謝意を表し、追悼の文とさせていただきます。

日本公衆衛生学会理事長
 大阪大学大学院医学系研究科教授

多田羅浩三

館 正知先生を想う



大正9年5月22日生
 昭和20年9月 北海道帝国大学
 医学部卒業
 昭和26年3月 北海道大学医学
 部講師
 昭和27年4月 北海道大学医学
 部助教授

昭和28年11月 岐阜県立大学医学部助教授
 昭和31年4月 岐阜県立大学医学部教授
 昭和40年4月 岐阜大学医学部教授
 昭和44年6月 岐阜大学学生部長
 昭和45年5月 岐阜大学医学部長
 昭和52年6月 岐阜大学学長
 昭和58年6月 岐阜大学名誉教授
 中央労働災害防止協会常任理事労働衛
 生検査センター所長
 昭和58年7月 食品衛生調査会委員長
 昭和58年9月 産業医科大学理事
 昭和61年4月 労働福祉事業団医監
 昭和63年4月 バイオアッセイ研究センター所長
 平成元年4月 健康被害予防事業検討委員会委員長
 平成5年4月 勲二等瑞宝章受章
 平成15年3月6日 ご逝去

「ふり返ってみると、私の在籍中の教室関係者の業績は多方面にわたっている。私自身が産業医学に関心があったので、その分野の論文が多いが、未熟児の問題や、乳幼児の不慮の事故の調査など当時解明をせまられていた問題に対応したものがこれに次いで多い。私は教室関係者に一部の人を除いて研究テーマを強制しなかった。現在の自分の職場で必要なことや自分の興味・関心に基づいたテーマで研究や調査をすることをすすめた。このことが私が在籍中の教室関係者の業績をバラエティに富んだものにしたように思う。一緒に考えたり、議論したりで、私自身の勉強になったものが多く、感謝している。」

以上の文言は、今春3月6日に急逝された館正知先生が岐阜大学医学部公衆衛生学講座の40周年記念業績集（平成5年4月）の刊行に際して寄せた序文中から引用したものである。まさにこの一

言が館先生の見識と人柄のすべてを物語っているように思う。

私は昭和39年に岐阜医大を卒業すると、迷わず館教室に入門したが、当時、教職員・大学院生は満杯状態であり、医師としての第一歩は岐阜県高山保健所からスタートすることになった。当時、岐阜県の保健所の所長や保健予防課長の多くは館門下生であったが、全国の保健所医師と同じように、高齢化が進んでいた。館先生は、医師になりたての私を有望な若手公衆衛生医として、当時の岐阜県衛生部長に売り込んでくれたのである。

その際の館先生の口上が「この松田を駄目にするようななら、もう保健所には医師を送らないぞ。大切に育ててくれ。」であったことを伝え聞いて、大いに感激したことをおぼえている。

館先生は当時の国立公衆衛生院を公衆衛生大学院と位置付け、門下生を毎年のように国内留学と称して派遣し、私もその恩恵に浴することができた。当院においては、館先生とその門下生は大きな存在であったはずである。一方、館先生は厚生行政にも多大な関心を抱かれ、私を含め多くの人材を厚生省に送り込むと同時に、同省で活躍している医系技官を出身校を問わず物心両面から応援して下さった。かくして、東京に「岐阜県ゆかりの会（館先生を囲む会）」なるものが出来上ったのは当然の成り行きであった。

館先生は無類の酒飲みのように見えたが本当は、より多くの人と酒を酌み交わしながらの自由闊達な論談を楽しみたかったのだろう。そして、その場所は公衆衛生学教室の抄読会室であったり、柳ヶ瀬の居酒屋であったり、御自宅（官舎）であったり、所を選ぶことはなかった。特に御自宅の場合は二次会、三次会の場となることが多く、時間帯は深夜に及んだが、奥様はいつも笑顔で私達を迎え入れ、酔っ払い談議に付き合って下さったものである。

以上は、館先生が公衆衛生学の権威としてだけではなく、かつての厚生省、労働省、環境庁、文部省等中央官庁における貴重な存在としても大方の敬意を得ていた背景の一端である。

厚生年金振興事業団常務理事

松田 朗

三浦 創先生



昭和2年10月29日生
 昭和28年 京都大学医学部卒業
 昭和32年 京都大学医学部助手
 昭和35年 長崎大学医学部助教授
 昭和46年 熊本大学医学部教授

平成5年 銀杏学園短期大学教授
 熊本大学名誉教授

平成15年4月18日 ご逝去

三浦創先生は、平成15年4月18日すい臓がんの為、享年76歳で他界されました。

先生は、昭和2年10月29日満州国奉天市のお生まれで、昭和28年3月京都大学医学部医学科を御卒業後、同大学大学院、同大学医学部助手をお務めの後、長崎大学医学部に助教授として転任、昭和46年9月熊本大学医学部教授に就任し、教育・研究に力を注がれた。平成5年3月、停年退官された。退官後も引き続き私立銀杏学園短期大学教授として、学生の教育指導及び私学教育の振興に尽力された。熊本市専門委員として保健衛生行政に尽力し、特にO157対策功労者として熊本市長より感謝状を授与されている。

教育面では、「環境保健」、「母子保健」、「医用統計学」等の授業を担当し、大学院生、学部学生等の教育指導にあたられた。先生の学識と穏健かつ厳格な学風は先生の御指導を受けた学生や若い研究者に感動を与え、多くの優秀な医学研究者等を輩出している。小生も、先生には助教授として7年間御指導を仰いだ。

研究面では、先生はライフワークとして「環境とボルフィリン代謝」に取り組み、なかでも外的要因のボルフィリン代謝障害として職業性鉛中毒にみられるボルフィリン代謝異常について研究し、赤血球遊離プロトボルフィリンが鉛暴露指標として有効であることを証明し、国内外から高く

評価された。また、騒音性難聴の評価とその予防に関する研究では、騒音作業者の騒音性難聴の進展度を新たに開発した「症度分類表」により分類を試み、この新分類法が妥当なものである事を証明し、学会で注目された。更に、熊本市の都市騒音問題、有機溶剤の生体影響についての研究、低体重児発生要因とその対策に関する疫学研究、更に作業衣等に関する衣服衛生学的研究を指導し、それぞれ貴重な研究成果を得ておられる。

学会活動として、日本産業衛生学会、日本公衆衛生学会、日本衛生学会（以上名誉会員）日本毒科学会等で要職を務められ、平成2年には第63回日本産業衛生学会を主催するなど、衛生・公衆衛生の発展に寄与された。

社会面においても、労働省鉛中毒及類似疾患検討委員会委員として、鉛中毒労災認定基準の検討及び鉛中毒認定申請症例の判定に専門家として参加し、余人に替えがたい専門知識を如何なく発揮し、その重責を果たしておられる。また、熊本県においては医療審議会委員、公害対策審議会委員として、更に、労働省労働衛生指導医を併任し、労働衛生の推進に対する業績に対して平成2年には熊本労働基準局長から労働衛生功績賞が、平成3年には労働大臣労働衛生功績賞が授与された。

京都大学衛生学講座三浦運一先生の御曹子でもあられた先生は、常に控え目で御家柄を意識した行動をとるよう努められている御様子だった。気さくで面倒見の良い先生、兄貴分のような先生、一方で厳格な面を併せ持っておられた先生、「日暮れて、なお道遠しだね」とまだまだ研究に教育に意欲を持っておられた先生、もっともっと先生から教わりたい事があったのにと残念でなりません。先生から賜りました温かい御厚情と御薫陶に感謝しつつ、心から御冥福を御祈り申し上げます。

大分大学医学部
 人間環境・社会医学講座
 予防医学分野

三角順一